

「木とともに歩んだ万博半世紀」

1970年から2025年へ変わる「木の価値」と「人の感性」



地域交流
万博特集

Walking with Wood Through Half a Century of Expositions
Key Words : Shift Toward Pragmatism, Pragmatic Approach
to Architecture

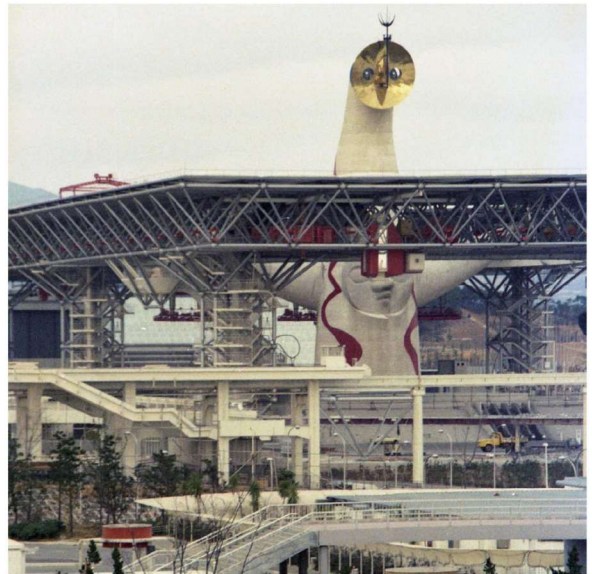
中川 勝 弘*

1. すべての始まりは 1970 年万博から

中学・高校・大学と、勉学やクラブ活動に一生懸命取り組んできましたが、思うような結果が出せず、自信の持てない学生時代を過ごしていました。「このままではいけない」と感じていた大学3年の年末、翌1970年に開催される大阪万博でアルバイト募集があることを知り、「お祭り広場」の進行係に応募しました。最初の仕事は、開会式での祝砲の合図係。その後すぐに万博協会に出向となり、正式に職員として採用され、残務整理を含め翌年3月まで協会勤務しました。

現場での仕事は刺激的で、異文化との交流や外国語への関心が一気に高まりました。特にインドネシア館の人たちと親しくなり、1か月ほどで日常会話ができるようになりました。そして、同年に父が参加した東南アジアの林業視察に同行し、通訳として役立つ経験も得られました。これが人生の大きな転機となり、内定していた企業を辞退して大手商社の木材部に中途入社。1971年6月にはインドネシアに赴任しました。

当時、父の会社は万博に仮設用木材を納入していましたが、完成後にはその姿が見えなくなってしまうことを、父は残念に思っていました。その思いを受け継ぎ、私は「完成後も形として残る仕事をした」と強く決意し、1975年に現在の会社へ入社し



上 太陽の塔とお祭り広場

下 インドネシア館の公演、舞踊、演奏など



* Katsuhiko NAKAGAWA

1948年生まれ。1971年 甲南大学法学部卒業。
1970～1971年 日本万国博覧会協会勤務。
1971～1973年 日綿実業(現・双日)勤務。
1975年 中川木材産業入社。
1988年より 代表取締役社長、現在に至る。
2014年より 大阪公立大学工学部 非常勤講師。
2008年 日本木材加工技術協会 市川賞受賞。
1995年より 業界最大の樹・木材情報サイトを
作成運営し、知識の普及に努める。
NHK番組では2023年「Beyond 1970万博」、
2025年「歴史探偵(万博と日本)」に出演。

ます。しかし、当時の主力事業は土木用の仮設材であり、木場の作業所や事務所は、雑然としていました。

私は「もっと美しく、楽しく、やりがいがあり、人に感謝される仕事がしたい」と強く願うようになりました。1980年には、父が間伐材を活用した家具やエクステリア事業をスタート。多額の資金を投じましたが、プロジェクトは失敗に終わりました。ただし、屋外用のフェンスやデッキ、遊具などの設



インドネシア・スマトラ ログボンド 原木の検品

計・施工ノウハウを蓄積できたことは、後の大きな財産となりました。

万博で目にした木の建築や空間に魅了されていたこともあり、1988年に社長に就任してからも、この分野の仕事を継続的に推進しました。当時、こうした分野に本格的に取り組む企業はほとんどなく、市場には大きな可能性がありました。やがて、神戸ポートアイランド博では、世界最大の丸太加工と展示という象徴的な仕事を受注。その後も、関西の地方博やテーマパークにおける木材施設を多数手がけ、淡路島や和歌山の博覧会でも実績を重ねました。なかでも、花博におけるメインデッキや政府館での間伐材トラスの加工は、大きな自信となる仕事でした。さらに、大型テーマパークの木造構築物にも幅広く関わり、企画・設計・施工・木材輸入までを自社で一貫して担う体制を築き上げました。これらのプロジェクトを通じて、会社としての方向性と実力を確立できたと実感しています。

このあたりで、「自分の人生の仕事は一区切りついた」と感じていました。ところが、再び大阪万博(2025年)の開催が決定。当社には営業担当がいなかったため、声がかかるのを待つしかありませんでしたが、幸いにも小規模ながら仕事を受注することができました。

振り返れば、私たちの会社の歩みは、常に万博やテーマパークとともにありました。1970年万博が与えてくれた経験と影響は、今も私たちの事業の根幹に息づいています。

2. 木材の利用例を70年万博と比較して見ていく

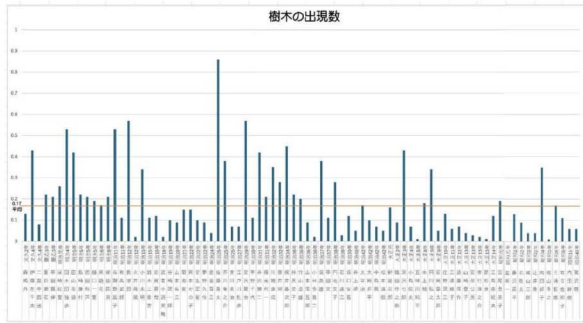
a. なぜ1970年万博で日本のパビリオンは木材を使用しなかったのか

1970年の大阪万博では、カナダ、アメリカ、ニュージーランドなどの先進国をはじめ、フィリピン、マレーシア、タンザニア、シンガポール、ビルマといった開発途上国のパビリオンも含め、19の海外パビリオンが木造または木造風の構造を採用していました。一方、日本のパビリオンでは木材はまったく使われていませんでした。

背景には「人類の進歩と調和」という万博のテーマがあります。当時は「進歩」の象徴として鉄やガラス、膜構造といった未来的素材が重視され、木材は「古い素材」として敬遠されていたのです。「調和」の面でも、自然との共生に最も適した素材である木材の価値が、再生可能性やCO₂固定といった環境



1970年万博 上段左からニュージーランド、ブルガリア、チェコスロバキア、ビルマ、下段左からカナダ・ブリティッシュコロンビア州、タンザニア、フィリピン、米国・ワシントン州、カナダの各パビリオン



小説家81名の年代(右が近年)と樹木名の出現回数

環境的利点を含めて十分に理解されていませんでした。

b. 「日本は木の文化」や「日本人は木が好き」というのは本当か

「日本は木の文化の国」「日本人は木が好きだ」とよく言われますが、私はそれに疑問を感じています。たとえば欧米（アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドを含む）と比べると、日本では屋外での木材利用が非常に少ないのが現実です。

また、昭和初期までは文学や日常生活の中に、木に関する豊かな語彙や描写が多く見られましたが、戦後になると明らかに減少していきます。自社で構築した文学データベースで81名の作家を比較したところ、時代の古い作家ほど「ケヤキ」「エノキ」など具体的な樹種名を使用しており、「敷居」「鴨居」「長押」などの用語も頻繁に登場します。ところが、近年の作家になると、ただ「木」と表現する例が多く、木への具

体的な認識が希薄になっている傾向が見られます。

c. なぜ木の価値が低かったのか

昭和後期までは、木材に対する関心が薄いだけでなく、実際の利用も限られていました。木材は「古くて終わった素材」として扱われることが多かったように思います。

自社のホームページを作成する際、木材の特性を整理し23項目にまとめました。欧米では木材を総合的に評価する文化がありますが、日本では一つの欠点で全体を否定する傾向があります。これが、木材の価値を過小評価させる要因の一つでした。

なぜそのような風潮が生まれたのかといえば、木の性質を全体として理解している人が少なくなってしまったからだと思います。昭和初期までは映画や落語などにも木に関する表現が自然に登場していましたが、近年ではほとんど見られません。また、大学などの教育現場でも木や木材に関する教育が十分に行われていないことも影響しているでしょう。

木材に対する最大の懸念は「腐ること」と「燃えること」です。

当社は日本で初めてウッドデッキを施工・商品化し、商標登録・ウィキペディアへの掲載・関連特許の取得などを行ってきましたが、特に「腐る」という問題には正面から取り組んできました。耐久性はお客様にとって最も重要なポイントであり、腐朽への対策が鍵となります。

数字で把握するために京都大学木材研究所に委託し、さまざまな樹種について腐朽菌に対する耐性試



2025年 大阪・関西万博 上段左からウズベキスタン、ハンガリー、ポーランド、スペイン、カタール、下段左からバーレーン、ドイツ、イタリア、アイルランド、オーストリアのパビリオン

験を何度も実施してきました。雨や白アリに強い木材もいくつか存在し、防腐処理によって利用可能なものもあります。花博以降、ウッドデッキは新築住宅でも広く採用されるようになりましたが、当時の建設業者や職人の多くは適切な木材を選ばず、建築の余材やホームセンターで手に入る一般材を使用して施工していました。その結果、3～5年で腐ってしまうケースが続出し、「やはり木は腐る」という印象が再び定着してしまいました。これは私たちが最も懸念していたことです。

しかし、近年ようやく「耐久性は木の種類によって異なる」という理解が広まり始めています。

もう一つの懸念である「燃えること」についても、欧米では早くから木の性質が正しく理解されていました。たとえば大径材であれば、燃えても表面が炭化して内部まで火が進みにくくなる性質があることが知られており、構造安全性の確保にも寄与します。

日本でもようやくこうした知見が認識されはじめ、最近では異素材と組み合わせで燃えにくくする新技術がゼネコンなどから開発されています。

このように、「腐ること」と「燃えること」という2つの欠点が過度に強調されたことが、長年にわたって木材の評価を低くしてきた一因だと考えています。

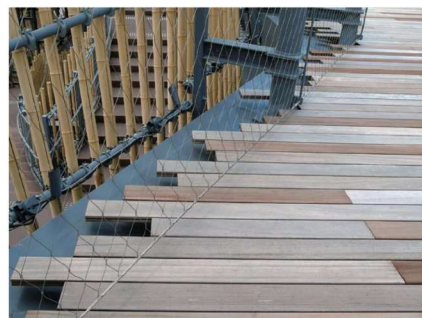
3. 2025年 大阪・関西万博に見る木材利用の進化

a. 木材利用の拡大

2025年大阪・関西万博では、木造の「大屋根リング」をはじめ、アイルランド、アラブ首長国連邦、イタリア、インドネシア、ウズベキスタン、オーストリア、北欧、スペイン、チェコ、ドイツ、バーレーン、ハンガリー、フィリピン、ポーランド、マレーシア、ルクセンブルグ、ルーマニアなどの各国パビリオンや、各種ステージ、休憩施設で木材が構造材・仕上げ材・外装材として広く使用されています。

再生可能性、循環性、炭素固定といった環境課題への対応として、木材の価値がようやく再評価され始めていることを感じます。

b. 仮設性・コスト・工期への対応



端をカットせずにそのままに、実用上問題はない

建築が「6か月の仮設」でよいという条件、解体・撤去のしやすさ、資材価格の高騰といった現代的・万博特有の事情が、木材の合理的な利用を後押ししています。

たとえば、ウッドデッキや軒裏などでは「千鳥張り」ではなく、端を突き合わせる簡易的な施工方法が多く採用されています。デザイン性ではやや劣るものの、施工時間や材料コストを大幅に抑える効果があります。

また、通常は使われない木材や、防腐処理をしていない材が使用されている例も見られます。内装に国産スギの並材（最も安価で入手しやすい木材）を使っているパビリオンもあり、コストと持続可能性を意識した選択が感じられます。



ドイツ館の庭園ウッドデッキ。施工は従来の専門業者基準まで届かない

c. 建築・会場の変化と人的要素の変化

会場運営では、会場地図のデジタル化やスタンプの形状統一、自然風景の演出、屋上デッキの活用、レストラン併設など、かつての万博とは異なる工夫が見られます。

あちこちに植えられた樹木や草花も、単なる装飾ではなく、あたかも最初からそこにあったかのような自然な演出がなされています。花壇に整然と並ん

だ花ではなく、野山に自生するような草花が主役となっています。

また、以前は「ホステス」と呼ばれていた案内係は、「パビリオンスタッフ」「アテンダント」と呼ばれるようになり、制服も堅苦しさをなくした動きやすいスタイルに。容姿や年齢に関係なく、いわゆる「普通の人」が対応している印象です。接遇も「お客様対応」というより、友達のような距離感に変化してきました。ただしお客様のグループ移動をさせるために、会話時間の余裕が少なく、質問に答えるのが精一杯という場面も多く、そこは少し残念に感じられます。

d. 木材の質・施工の変化

高級材の使用はほとんど見られず、普通材・並材・節あり材が多く使用されています。従来、日本では白木が好まれてきましたが、今回はその傾向が大きく変化しています。

北欧館やカタル館では濃い塗装が施され、ルーマニア館では焼きスギが使われています。オーストリア館では、接着剤を使わず多数の釘やビスで板を留め、湾曲した構造を実現。スイス館やオーストリア館では地面に直接木材を埋め込んだウッドデッキが設置されています。

ポーランド館では短い木材を組み合わせた外観が特徴で、使用されているのは鹿児島産のスギです。これは自国から輸送するより、日本国内で調達した方が環境負荷が少ないと判断された結果です。

一方、アイルランド館やチェコ館では、それぞれの国から木材を持ち込んでいます。ウズベキスタン館では、日本各地から調達した丸太を使っており、スマートフォンをかざすと産地がわかるトレーサビ



入場ゲート 軒裏の杉板は突合わせて張ってある

リティ機能が付与されています。

マレーシア館の屋上ウッドデッキは、施工の合理性と実用性、そしてデザイン性を両立させています。イタリア館、ドイツ館、バーレーン館は完全な木造で、イタリア館には屋上にレストランと庭園が、ドイツ館には建物とデッキが一体化した美しい構成が、バーレーン館には日本の在来工法に似た、しかし高度に設計された4階建ての構成が見られます。

全体的に見て、施工はDIY風で粗めな仕上がりが多く、構造も簡素化されており、従来の精緻な木造とは異なる新しい方向性が浮かび上がっています。これは、予算・納期・環境配慮といった現代の要請に応える実務的な対応の結果であり、時代の変化を反映したものと感じます。

4. 哲学的に見る変化-プラグマティズムと感性

a. パビリオン建築に見るプラグマティズム的転換

アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズが提唱した「プラグマティズム (実利・実用重視)」の考え方が、2025万博の建築や施設に徐々に浸透してきたように感じます。かつての建築は「見た目の完璧さ」「意匠の精緻さ」を重視していましたが、現代では「必要な機能を、限られたコストと時間で実現する」実用主義的な価値観が前面に出ています。この変化は、SDGsの観点からも評価されるべき方向性であり、万博の建築にも表れています。1970年から2025年への変化は一足飛びではなく、1990年の花博、1994年の世界リゾート博などを経て、段階的に進んできたものです。不都合があれば修正しながら対応してきた姿勢は、まさにプラグマティズムの実例といえるでしょう。

b. 欧米と日本における感性の違い

欧米では、実用性の中に感性が宿っています。たとえば、テーブル、ベンチ、手すり等で人が直接触れる箇所は木材を利用しています。また塀やフェンス、窓、開口部など目に見える所も木材を多用しています。

一方、日本では効率性や清潔さにおいて優れているものの、空間や素材に「温もり」や「風合い」を加える感性はまだ発展途上にあると感じます。木材



塗装をすることで耐久性と境界がはっきりする。
フィンランド



簡素な構造だが見栄えよく、炭素固定化と景観に
役立っている。ベルギー

や草花といった自然素材を積極的に取り入れる姿勢は、今後さらに高めていく必要があるでしょう。この感性の違いは、建築における素材の扱い方や空間演出にも現れており、万博という国際的舞台上で一層明確になります。

5. 結びにかえて

1970年の万博との出会いをきっかけに、私は木材を取り巻く考え方や社会の変化を、現場の最前線で半世紀以上にわたり見続けてきました。かつては「古い素材」「時代遅れ」と見なされていた木材が、今や再生可能資源として、また環境と感性をつなぐ素材として再評価されています。2025年の万博では、かつてとは異なる形で木が使われ、建築や空間、人々の意識の中で確かな存在感を放っているのを感じました。

日本においても、木の価値、木の文化、木を通じた感性が、社会全体により深く根づいていくことを願っています。木材業界の一員として、そして1970年万博から木と共に歩んできた者として、これからも木の魅力と可能性を伝え、次世代に受け継いでいく活動に取り組んでいきたいと思えます。

元資料・詳細情報、引用

大阪万博の仕事と思い出 >>
アルバイトから協会職員へ、職員証など
<https://wood.jp/indonesia/expo/>



1970 万博インドネシア館の人達>>
96人の館員との友情と交流で語学習得
<https://wood.jp/indonesia/expo70/>



インドネシアでの仕事 >>
さまざまな仕事や現地の人たちとの交流
<https://wood.jp/indonesia/1971-73/>



博覧会と施設提供 >>
花博、世界リゾート博、関西万博への提供
<https://wood.jp/12-product/expo70wood/teikyo.html>



テーマパークと木材 >>
USJ とディズニーシーの木材利用比較
<https://wood.jp/9-building/usj/usj-wood.htm>



文学小説と木材 >>
小説中の作家別樹木の出現箇所と回数
<https://wood.jp/6-bunka/bungaku/>



木材の特長23 >>
さまざまな切り口からの木の特長や性質
<https://wood.jp/10-chishiki/tokucho/>



1970 年万博と木材 >>
海外パビリオンの木材の用い方と展示
<https://wood.jp/10-chishiki/tokucho/>



2025 年万博と木材 >>
現代の万博での木材の使い方と優位性
<https://wood.jp/12-product/expo2025/>



屋外の木の施設 >>
当社の屋外木造施設の企画、施工事例
<https://woodenstructure.net/>



会社公式ホームページ >>
当社の業務内容と会社紹介や案内など
<https://wood.co.jp/>

